KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

極限状況に置かれた人間の「解放」：公房、キプリングに見られる他者関係の再構築を通して

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 関西外国語大学
	公開日: 2019-03-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: ゴーシュ・ダスティダー, デバシリタ
	メールアドレス:
	所属: 関西外国語大学
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/7863

極限状況に置かれた人間の「解放」
―公房、キプリングに見られる他者関係の再構築を通して―

外国語学部講師　デバシリタ・ゴーシュ・ダスティダー

はじめに

本論文は、安部公房の名作『砂の女』（一九六四年）の主人公、仁木順平の砂の集落からの脱出というプロットに集約して浮上してきた課題を考察するものである。そのために、公房の描く「解放」の主題にとって、ラドヤード・キプリングの『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』（一八八五年）との比較考察が有効だと考える。個々のテキストを見ていくと、まず『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』の次の文章に注目される。

> 「あなたももう一人の白人のように死ぬまでここにいるでしょう」（中略）「もう一人のヨーロッパ人だって？さあ、本当のことを言え」（中略）「自分で見てください。あの人は穴の中で死んだ。あなたも私もここの誰もがやがてそうなる」（四三～四四頁）

『砂の女』にもほとんど類似のシチュエーションが記されている。

> 「ぼくのほかにも、誰か、捕まっているやつがいるわけなんだね？」
> 「はい、去年秋口のころでしたか、たしかに絵葉書家さんかね……」（七二頁）

『砂の女』に、仁木順平以前に、ある絵葉書家が砂穴の集落に閉じこめられ、体が弱かったために、後に死んでしまうというエピソードがある。仁木順平とジュークスが閉じこめられたのは、彼らだけがこうなったのではないこと

に対してそれぞれの反応が語られている。砂の集落という空間の仕掛けの類似はともかくとして、いずれもそこに落ち込む、あるいは入り込むことによって二人の主人公の人生は一変してしまう。かくして、砂の集落に閉じこめられた二人の主人公は、そこからの脱出を考える。この脱出の意味をあえてあらかじめ言うならば、それは集落の人々にとっての「他者」である仁木順平とジュークスの閉塞状況、すなわち被支配・疎外・孤独からの脱出を象徴するといえよう。彼らが砂の穴に閉じこめられることで自らの人生を反省するとともに、それでも支配する者の権力に服従せざるをえない姿勢が見て取れる。

人生の反省と権力への服従といえば、罪を犯した者と監視による処罰形式が想起される。そこでミシェル・フーコー（一九二六―一九八四）の「パノプティコン」(1) という監獄形式と「規律訓練型権力のモデル」(2) を砂の集落の構造と関連づけることができるのではないか。そしてそこから「パノプティコン」の新たな解釈を試みることはこの作品論に新しい地平を開くことになろう。すなわち、社会秩序は一人一人（仁木順平とジュークス）を常に監視しているということを自ら認め、その監視によって自己反省するようになるというプロセスをフーコーの「パノプティコン」の解釈を通して明らかにしたい。二人は「解放」に向かって最後まで戦い、それを達成する。そのプロットは「パノプティコン」とは異なってしまうが、砂の集落の構造、権力システムに抵抗しているうちに加担してしまうといった彼らの心理状態に注目すると、「パノプティコン」を脱出するところ、それによって「パノプティコン」の構造が無効になるところ、すなわち「規律訓練型権力のモデル」における「生産性」の解釈との比較は可能なのであって、それによってジュークスと仁木順平の権力に関する見解の違いの分析が捉えられると考える。そこには仁木順平とジュークスがそれぞれに権力に反抗しつつ内在化していくそれぞれの過程が現れ出ると信ずる。

『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』と『砂の女』では主人公たちが砂の穴に落ち込むことによって展開される物語、突飛で意外な極限状況に置かれた人間の孤独、他者による抑圧・非主体化といった他者関係、コミュニ

ケーションの問題などが一方にあるとすれば、その穴からの脱出という、もう一方のプロットを通して人間の「解放」という問題が切実に描かれている。二人の作家は、共に支配者・権力者の側に属していたが（日本と大英帝国）、植民地戦争に敗れるという敗戦体験をもったことが、このようなプロットと主題を追求させたと考えることができる。その背景には、一方は植民地／被植民地の権力と支配／被支配関係がいかに人間性を傷つけているか、また一方では日本近代における高度成長期の社会システムがいかに人間性を疎外しているかの憤りがあったと見られる。その意味で、両作品に表現される砂の集落の権力に対する抵抗と、「解放」の希望は植民地体験にも関係するといえよう。

「パノプティコン」としての砂の集落

ここではフーコーが提示した権力言説を参照することで『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』と『砂の女』における「解放」がいかなる意味をもっているのかを検討していきたい。そのためにまずフーコーの権力言説をもとに、「パノプティコン」としての砂の集落について考察を深めよう。人間を管理の対象として、行動を綿密にコントロールし、従順な身体を作り上げるという『監獄の誕生』における規律権力モデルは、監視と処罰を繰り返すことで国家にふさわしい規格化された人間を形成するというものである。フーコーの思想では社会からの自由は存在しないが、社会の抑圧的権力に「抵抗」すること、そこに自由の可能性を認める。しかし支配的権力に抵抗し続けることによって、外部への解放・自由を目指すのではなく、かえって自己反省しながら内面的変化をもたらすことで権力システムを自ら支える心理を持つようになる。このような人間心理に反応するフーコーの提起する権力概念は、近代社会の権力メカニズム論に新たな視野を提示した。フーコーは国家から家族にまで及ぶ権力システムが個々人を対象にし、（パノプティコンの設計図 出典『監獄の誕生』、新潮社、一九七七年、一七頁）日常的な秩序

と規律の関係において行使される権力の常識的なモデルを提示することに成功した。

このようにみてくると、公房とキプリングの両作品に見える権力に対する抵抗を「解放」と結びつけながら問題意識を検討するとき、「パノプティコン」構造と人間心理の相関が有効な意味をもつことがわかる。そこで、ジュークスと仁木順平が閉じこめられた砂の集落の権力システムと二人がそのシステムによっていかに規格化されるのかについて「パノプティコン」構造のモデルと対比して考察することにしよう。処罰的な規律や監視および「パノプティコン」型の権力システムにおいて規律・訓練された人間、そこに作用する権力構造を背景にして砂の集落を考える際にフーコーの次の論が参考になる。

> ベンサムの考えついた〈パノプティコン〉は、こうした組み合わせの建築学的な形である。その原理はよく知られているとおりであって、周囲には円環状の建物、中心に塔を配して、塔には円周状にそれを取り巻く建物の内側に面して大きい窓がいくつもつけられる(塔から内庭ごしに、周囲の建物のなかを監視するわけである)。(中略)一望監視の仕掛けは、中断なく相手を見ることができ即座に判別しうる、そうした空間上の単位を計画配置している。(3)

「パノプティコン」は一八世紀のイギリスの思想家ジェレミー・ベンサムが計画した集中型監獄であり、円環型の建物で真ん中が監視施設として建築され、そこから周囲が監視できるようになっている。「一望監視施設」とも呼ばれ、ガラス屋根の囚人棟が放射状に配置され、全てが見渡せるように設計されている。「パノプティコン」構造の中では、一人ひとりが常に監視されている。囚人は他人からの監視の目を内面化し、自己を規律していくように訓練される。すなわち、フーコーは「パノプティコン」における監視の視点に独自の解釈を付け加え、社会秩序において他者による監視が構造的に含み込まれている点を指摘したのである。

このフーコーの「パノプティコン」における権力の作用・監視・処罰とい

う概念は、『砂の女』と『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』の砂の集落というモチーフの解釈に用いることができる。仁木順平とジュークスはそれぞれの砂の集落で「監獄の誕生」の「パノプティコン」における「〈一望監視施設〉は、いわば実験を行い、行動を変えさせ、個々を訓育したり、再訓育したりする一種の機械仕掛けとして活用している」ように訓練のプロセスを経て権力に馴致させられる。

『砂の女』と『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』における集落と主人公の心理的変化には、「パノプティコン」的な仕組みが関与している。すなわち集落のなかに束縛されている主人公たちが原住民や村人に〈見られている〉ことを自覚している状況が描かれている点に、まずこのパノプティコンの特徴が見いだせる。『砂の女』の次の引用をみてみる。

> その視線をたどっていくと、彼が背にしていた東側の壁の上からも、頭が三つ、行儀よく並んで、こちらを見下ろしているのだ。すっぽり手拭をかぶっていたし、口から下は隠れているので、はっきりしないが、どうやら昨日の年寄りたちらしくもある。（四六頁）

『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』にも〈見られる〉モチーフが強調されている。

> ぼろをまとったこの連中は私を笑ったのである。しかも二度と耳にしたくないような声で。彼らのなかに歩みいるとあらゆる嘲笑、高笑い、叫び声、口笛が浴びせられた。中には文字どおり地面に笑い転げる者もいた。（二九頁）

> 私は彼に近づき、クレーターからの脱出法について聞いている間に群衆は、離れた所からこちらを見ていた。（三〇頁）

強制された砂の穴の生活と毎日の単調な砂掻きの仕事は、仁木順平にとっ

ては耐え難いものであった。しかし、村人の「見る」まなざしの圧力によって彼は仕事へと駆り立てられていく。このように、監視されていることを内面化させることによって、主人公たちは訓練されていく。ただあらかじめいえば、この二人の主人公はけっして監視を〈内在化〉するのではない。村人に「見られている」仁木順平は、その村人の監視によっていやおうなく訓練されるわけである。それに対して『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』の引用本文では「笑い」と「見る」という行為の暴力性が感じられるとともに、原住民による白人男性の監視が確認できる。

他人の「視線」を意識するということはよくあることかもしれない。しかし、意識ということは制約されることでもある。それは「視線」の暴力といってよかろう。次の言葉にこの視線の暴力性が象徴的に表れている。「見られていることが、むしろ男を仕事にかりたてた」というのがそれだ。したがって、「視線」を意識するということ自体が彼を制約していた。しかし、すでに言及したように彼は監視、規格化、訓練を内面化するのではなく最後まで「抵抗」を繰り返す。そのことが「パノプティコン」思想とは異なっているのである。

両作品には、権力に対する抵抗という重要な意味を持つプロセスが含まれていることが、このことからわかろう。では、「パノプティコン」的権力に対する抵抗を「解放」とつなげて追究するとどうなるだろうか。フーコーは、『監獄の誕生』における権力論において、その中心になっている規律、訓練、訓育は近代社会の管理・育成に必要であるとして、それを権力がどう捉えているのかを次のように言う。

この規律こそが個々の人を〈作り出す〉のであり、それは個々人を権力行使の客体ならびに道具として手に入れる、そうした権力の特定の技術である。（中略）計画的な、だが限りない経済策をもとに機能する、つつましやかで疑い深い権力である。(5)

「パノプティコン」における「権力」システムが近代社会に適用され「この規律こそが個々の人を〈作り出す〉のであり」というのは「規律・訓練」

という概念によって個人を秩序の中にはめ込み、社会という一種の権力システムに服従する主体を作り出してきたということである。しかし、フーコーは、このシステムが完璧でないことも自覚している。規律は、個人の生活全体を監視し、個人の行動を束縛し、自由の余地を個人の中に残さない。つまり規律に表象される社会は、無限の人生の中に個を閉じ込め、労働と消費の必要性に永遠に従属させることで植物や動物と同様のものに組み込んでしまう。このようなシステムに抵抗する個人についてフーコーは「抵抗や批判の可能性を有することが前提とされている」ともいっている。それを関良徳は次のように解説する。

> 彼の説明によれば、権力関係とは個々人の間の日常的実践の総体であり、闘争や衝突といった性質によって特徴付けられるものであった。それゆえ、権力関係にある人々は常に抵抗や批判の可能性を有することが前提とされているため、原理的に一定の自由を有することが条件とされている。(6)

この抵抗を正当化するフーコーの論理は重要だが、キプリングと公房の作品分析を通してみると、規律権力は個の思考や行動の自由を奪い、一定の規範への服従を強制されることも明らかになる。とすればこれらの文学作品は、権力に抵抗し「解放」を求めるというプロットのところで「パノプティコン」のメカニズムとは分かれ、作品独自のメカニズムを取るようになる。その独自性をあらかじめ概念化するならば、確かに、砂の集落にも監視・規律・訓練・処罰というシステムがあったために、徐々に仁木順平にも、またとジュークスにも予想外な変化が見られるようになる。しかし、仁木順平は他者とコミュニケーションをとるようになり、絶望的な状況から「解放」に向けて「希望」を発見する。ジュークスもダスにいくら屈辱を与えられても彼に依存せざるをえず、ダスの属する社会習慣に従って鳥まで食べるようになる。そこでジュークスは個人と社会の関係における「解放」について考え、権力そのものもけっして悲観的ではないことも事実だと理解するようになる。

ジュークスと村人の出会い

本来であれば、とても比較考察の対象になりえないと思われる「パノプティコン」の権力メカニズムをキプリングと公房の二つの作品と比較しようとしたのか。それにはフーコーのいう監視ということが支配システムの原理に認めたことに注目するからだ。キプリングと公房の文学作品の得意なプロットは、主人公が砂の穴／クレーターに落ち込むというところにあるのだが、そのプロットで二人の作家が共通に捉えたのが〈見る〉と〈見られる〉という視線の交錯が他者関係／支配関係を規制する暴力的な〈監視〉につながるからである。ところが、フーコーの「パノプティコン」が近代国家の権力システムの原理構築が思索の課題であったのに対して、二つの文学作品は、そこからの人間の「解放」に焦点を当てている。同じ近代国家と人間の関係に焦点を当てながらも、政治社会学と文学とは、人間を捉える焦点が異なるのかに興味をおぼえたからである。

ジュークスとガンガ・ダスが、砂の集落内部に取り込まれてしまうという突飛な事件を木村は次のようにいっている。

> 「モロウビー・ジュークスの不思議な旅」にも現れるが、この経験はそこでも主人公のイギリス人を激しく動揺させている。キップリングにとって被支配者から支配者に向けられるこのような笑いは、両者の権力ヒエラルキー危機や転覆を暗示する、一種象徴的な事件であったようだ。(7)

木村が指摘しているように、「オリエンタリズム」的な支配関係／他者関係がこの作品では反転してしまっている。しかもそれと同時に、監獄のような砂のクレーターの中でいつも村人たちによって見張られ、主人公の行動は束縛される。「群衆は離れた所からこちらを見ていた」という「視線」の暴力と「笑い声」に苛立ちを感じているジュークスの不安をも捉えていることは注意されてよい。植民者側のジュークスにとって集落での経験を「一種象

徴的な事件」として述べている。支配者が被支配者になる（権力関係の反転）ことは、未来の予測不能性というキプリングの先立った考え方が読み取れることを指している。

ジュークスは集落の権力システムの中に置かれる。そこで集落の主任は、ジュークスに「規律・訓練」や「統治」のような権力システムを受け入れさせていく。次の引用は、ジュークスが集落の生活の慣習を受け入れざるをえないことを暗示している。それが「規律・訓練」になるだろう。

> 「今日、明日ではないだろうが、最後にはおまえも鳥を捕まえて、食うようになるだろう。鳥を食べられるだけでもヨーロッパの神とやらに感謝するようになる」（三八頁）

ジュークスは集落に入り込んで逃げられなくなったあと、原住民と同じ生活をさせられる。つまり、鳥を食べたり、穴の中に寝たりするしかなかった。こうして村人にとって彼は異質な存在であるが、その行動を束縛されることで集落の一員として訓練されていく。ジュークスも実感しているように、彼はイギリス人であり、村の外では植民者として強力な存在であるが、村の中では彼の社会的特権は何の意味も持たない。

> この呪われた場所には強者の法以外の法はないのだ。外の世界の法の規範はここで通用しない。ここで生きていくには自分の力と警戒に頼るほかはない。（中略）このようにいったん決心がつくと私はできるだけたくさん食べ飲んだ。そしてダスには自分が支配者であること、少しでも彼が言うことを聞かぬなら即座に最後の手段、つまりその場で殺すぞと告げた。（四〇頁）

ダス以外の村の人々とのコミュニケーションが不可能な状況設定のために村人との関係の描写は少ないが、彼は砂のクレーターでは他者の位置に置かれ、集落の人々に対して強い嫌悪を感じているのだが、監視による抑圧・軽

蔑・支配の対象とされる。それでも、ジュークスはイギリス植民者の自尊心を失うまいとする（自分が支配者である）。そこには権力行使者（村人の代表者ダス）と被行使者（ジュークス）という二つの主体の対立が設定されている。それゆえにジュークスは、自らの屈辱的立場の自覚から否定的な権力・抑圧的な権力を拒絶し、そこからの「解放」を求める。

仁木順平と村人の出会い

『砂の女』のストーリーは主人公の仁木順平が、砂の集落の人々によって「砂の女」と同居させられるようになるというシチュエーションと集落の中の一人の老人が仁木順平を「砂の女」に紹介したことから始まる。以後彼はこの「砂の女」と一緒に暮らすようになるのだが、このきわめて簡単なプロットの紹介からだけでも、主人公と村人の人間関係に注意しなければならないことが窺えよう。そこにはストーリー的には語られていないものの、やはり知的・学問的・文化的に優れた先進的な都市からやってきた主人公と村人たちの間に〈見るもの＝仁木順平〉と〈見られるもの＝村人〉という他者関係が成立しているではなかろうか。

仁木順平は一晩過ごすためにやってきた砂の集落に閉じこめられてしまうことなど想像もしなかった。しかし、彼は砂の集落に閉じこめられ、たった一人のマイノリティとなって、集落の人々によって自由を奪われる。ここにおいて冒頭での設定が反転する。集落に閉じこめられてから〈見るもの＝村人〉と〈見られるもの＝仁木順平〉との他者関係／支配関係が設定される。ただそんななかで、彼は「砂の女」との男女関係において〈見るもの＝仁木順平〉と〈見られるもの＝砂の女〉という関係をかろうじて維持することで、男が「砂の女」を支配する。集落内に弱者を見つけ、その弱者に対して支配／被支配関係を作ることで、集落と自己の支配／被支配関係の屈辱を埋め合わせようとする。その関係はジュークスとダスの関係に対比できよう。実質的には、ジュークスはダスの支配下にあったが、ジュークスの勘違いにおいてダスを支配している幻想を抱いていた。そこに屈辱の代償が捉えられよう。

それはともかく、両作品において〈見るもの／見られるもの〉の関係による行動の束縛に、「我ら」と「彼ら」の関係の逆転を見ることができる。しかも主人公と砂の集落の村人の人間関係を視線に集約するというところにも、すでに考察したジュークスと村人の関係の類似をみることができる。つねに村人の視線に〈見られている〉という設定は『不思議な旅』にも共通している。

『砂の女』の集落共同体は国家をも表象するものと考えることができるならば、仁木順平にとっての「解放」とは共同体と個人、あるいは国家と個人の関係に還元される。それゆえに、砂の集落が監視・規律・訓練・処罰という権力メカニズムをもって個人を取り込もうとするとき、男はそれを拒否する。男と「砂の女」の次の会話をみてみよう。

> 「しかし、これじゃまるで、砂掻きするためにだけ生きているようなものじゃないか！」
> 「だって、夜逃げするわけにもいけませんしねえ……」男はますますうろたえる。そんな生活の内側にまで、かかわり合いになるつもりはなかったのだ。「出来るさ！……簡単じゃないか……しようと思えば、いくらだってできるよ！」（二七頁）

仁木順平の場合もジュークスのように強制された砂の集落の生き方を受け入れるしかなかった。村の人々から「砂の女」との同居を強制され、砂の集落の権力システムによって強制された、毎日の砂掻き作業の訓練を繰り返しながら生きていく「砂の女」と生活することを余儀なくされた。彼らは集落から疎外されながらも、集落の規制に従って生きざるをえない極限状況にいるといえる。

『砂の女』の主人公は、集落の毎夜砂掻き作業を繰り返すうちに集落の秩序に同化していくにちがいないと村人は思っていた。しかし仁木順平からすると、いつも村人に監視される自分の閉塞状況に不満を抱くようになり、時には集落側の人質として「砂の女」を縛り上げて拷問する。それが男の暴力

を利用した抑圧回避の代償行為であるということはすでに指摘したが、それはまた村人を脅迫する怒りの行為でもあった。このような極端な行為に走らざるをえないのは、日々ますます大きくなってゆく自由の圧殺への恐怖を反映しているとみてよかろう。

> こっちだって、人間なんだから、犬に鎖をつけるようには、簡単にいけないってことさ……誰が見たって、立派な正当防衛だよ。（六四頁）

この仁木順平の言葉には、集落では自分も動物と同様の仕打ちをされているという不当な扱いへの抵抗と糾弾が含まれている。その言葉の背景には〈鎖〉をつけて人間を束縛してはいけないという解放への強烈な主張がある。

それゆえにこそ、ジュークスと同じく彼は村人に支配、束縛されることを拒否し、集落の人々によって加えられる権力的支配と積極的に闘ってゆくことを決意するところでフーコーの権力システムの原理を逸脱する。「パノプティコン」における監視と抵抗というフーコーの命題と、これまで述べてきた二つの小説との類似点を捉えようとするならば、それは権力に縛られたものと権力から逸脱しようとするものが存在するというところにあるということができよう。

ただフーコーにとって、「パノプティコン」において注目されたのは、その監視のシステムに見られる権力作用の原理であって、それに対する抵抗の正当性は論理的に可能であることを示唆するにとどまっていた。公房とキプリングの小説はむしろ、監視による権力システムから二人の主人公がいかに脱出「解放」するかにプロットのクライマックスがあることがわかろう。仁木順平が求める脱出方法の立場の差異が明らかになる。そこに「オリエンタリズム」の作品と、日本人の閉鎖状況からの脱出という主題の位相差がうかがえることになる。次節では、ジュークスと仁木順平にとっての人間（性）の「解放」を、権力システムから逸脱という脱出行為とからめて解釈する。

ジュークスにとっての「解放」

「解放」の解釈にあたって、まず両者に共通する特徴の「捕まえられた昆虫」という比喩表現をみてみよう。「モロウビー・ジュークスの不思議な旅」では、「子供が串刺しにしたかぶと虫がもがく様子」という喩えが見られる。これはジュークスが砂のクレーターに捉えられた状態を比喩するものだが、同じ比喩表現が『砂の女』にも認められる。仁木順平は昆虫採集家であったが、彼もジュークスと同じように捕まえられた昆虫の喩えによって自身の身体の束縛を見つめ返している。『砂の女』にハンミョウ属の虫について次のような表現がある。「うかうかとハンミョウ属のさそいに乗って、逃げ場のない砂漠の中につれこまれた、飢えた子鼠同然に」と。

この虫の比喩がまるで伏線、あるいは主人公の行動の予徴となるごとく、『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』の主人公ジュークスというイギリス人は、インドの砂漠地帯にある砂のクレーターに落下し、「蟻地獄に捕まった」ような恐怖を味わう。そのクレーターの中では「パノプティコン」と同様な住人たちによる複雑な権力装置が機能しており、クレーターに陥んだジュークスはそのシステムを受け入れるしかなかった。いつ死ぬかもわからない極限状況に置かれたジュークスはこの集落の支配下で、支配や監視のメカニズムをよく観察し、住人とコミュニケーションを取ることで、クレーターからの脱出に挑む。そのクレーターの光景をキプリングは迷宮的でオカルト的な村の特徴として迫真の描写で捉えている。『ラドヤード・キプリング作品と批評』では、塩谷清人はジュークスの状況について次のように語っている。

> 話のベースになっているのは、死にそこなって生き返ったため現実社会から疎外され（インドのヒンドゥー社会ではそのような人間は忌み嫌われる）隔離されて生きるインド人たちの社会がある（現在でもある）こと。そのコミュニティをキプリングは象徴的に漏斗の形にし、誤って入り込んだ主人公のイギリス人が脱出しようとシジポス的に苦悩する物語

にしている。ここではもはや、支配者、被支配者の区別すらない。[8]

死の村に陥んだ主人公のシジポス的[9]状況、過酷な村における運命というのは人間存在にとっての危機的な閉鎖状況を象徴している。
そこから導かれるとき、「そのコミュニティをキプリングは象徴的に漏斗の形にし」と言及していることに注意したい。キプリングに集落のコミュニティを漏斗と同様な形状として描く意図があったとしたら、そこでダスとジュークスの間に権力関係を設定する必要はなかったのではなかろうか。本論文で論じてきた支配者／被支配者という関係から言えば、白人男性が原住民のダスを「保護者とみなす」（三四頁）「生殺与奪の権を持つこの男」（三四頁）といい、その一方でジュークスが「サーヒブでありながらここでは子供同然に無力で、住民の慈悲にすがる身の上だった」（三六頁）という被支配の状態に陥っていたことが語られている。このような記述からすると、彼らの関係と結びつけて集落のコミュニティを漏斗の形状として描くという姿勢は、まったく異なっているのではないだろうか。つまり、そこでは支配構造をまったく無視するのかのように、「支配者、被支配者の区別すらない」と作品を理解しているようにみえる。しかし、原住民のダスは白人を圧倒するほどの支配的存在として描かれ、権力関係の反転をもたらすコミュニティの支配者として描かれている。

そのアンビバレントな関係描写が示唆するところからすると、非現実的な世界が現実的な世界に変わり、イギリス人の想像の届かないところに行き着いたのである。閉鎖された村落社会のなかにおけるある白人男性(Sahib)は、村の住人たちとどのようにコミュニケーションを取り、いかにそこから脱出を企てるのか、そのプロセスにキプリングはインドと大英帝国の関係における新たな展開を予想させ、植民者と被植民者の権力関係を逆転するというモチーフを見出したのである。

『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』では、ジュークスと村人の関係はコロニアル的な設定のなかでこそ成立する関係の逆転である。それゆえオリエンタリストのジュークスにとっては拒絶や排除といった否定的・抑圧

的な関係が生み出されていることになる。クレーターの住人による支配を受けることで「住民の慈悲にすがる身の上だった」（三六頁）ジュークスを抑圧するネガティヴな装置をそこに読み取ることができ、その反転の彼方に植民地帝国の権力者の抑圧的な傾向が問題化されている。キプリングの『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』では、主人公のジュークスは逆オリエンタリズム（支配者と被支配者の権力関係が逆転した様相）の状況に陥るのだが、それに我慢のならない彼は、原住民を代表するインド人のガンガ・ダスに抵抗するが、集落からの「解放」の欲望が強くなり、自由を達成するためには、自己の内側から全力を尽くして戦う以外に手段はなかった。なぜそうしなければならないのか。ジュークスは砂のクレーターに落ち込む以前、植民地帝国のイギリス政府によって身分と生活を保証された支配者側の人間であって、原住民より優勢な立場にあり、数々の特権が与えられていたからである。ところが、クレーターに落ち込むことで支配／被支配の権力関係が見事に逆転され、大英帝国の権力によって保証された特権をまったく無効にされてしまう。次の引用は、『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』で描いた人間世界の予測不能性を捉えたものである。

> Mr. Kipling does not insolently explain that India is thus and thus. He allows the impression to grow upon us, as once it grew upon himself, that in India all the settled ways of the west are insecure. (10)

> キプリング氏はインドを云々と説明するのではない。彼がかつて経験したのと同様に、インドでは確固とした西洋のあらゆる流儀が不安定であるという印象がわれわれ読者の中で自然に成長するようにさせている。（拙訳）

この引用が述べている通り、『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』でも主人公のジュークスはインドという巨大な国の人間と自然の持つ不可思議な魅力、その内部にひそむ危険をエキゾチシズム的要素を加えながらも、植

民地支配下に置かれたインドの危機的状況を捉えているといえる。そこに権力についての複雑な側面が隠されている。

『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』も、植民地内部の緊張、つまり「確固とした西洋のあらゆる流儀が不安定」という現実を浮き彫りにし、植民者と被植民者の対立が背景にあることを示唆している。この作品におけるジュークスの危機できわめて詳しく描かれているのは、彼の被支配のみじめな姿だけでなく、それを反転させれば植民地に関する支配や政治状況、白人によって支配された原住民の痛ましい状況ともなるということである。

クレーターから脱出を試みるジュークスの必死な姿は次のように描かれる。「逃げ出す道はないのか？」「まったくない。ここにきた当初はだれもがしばしば逃げだそうと試みる」（三二頁）「交互に神を罵り、祈り、クレーターの底を走り回った」（三三頁）。脱出を求めている主人公の白人男性に大英帝国の支配下にある植民地（インド）の内部にそのまま安定した場所を与えるのではなく、隔絶した死者の部落に落ち込ませるということは社会から隔離された「パノプティコン」の構造と似て、死者のごとき生者が異邦人を監視・規律・訓練し、その社会に馴致するためのシステムが働いている。ジュークスはクレーターに落とされてから、人生最大の危機に直面するのである。オリエンタリストの彼からすれば、反オリエンタリズムの状況からの「解放」を達成するためにいくら失敗しても、彼は最後まであきらめようとしない。

> 推測するところ、村は大昔から、（ということは少なくとも百年前から）存在し、今までここを出た者はいないらしかった。（三五頁）

> 彼が繰り返し言ったことは「逃げ道はまったくない」ということと「死ぬまでここにいて、死んだら、砂地に放り出される」ということだった。（三六頁）

> 険しい砂の壁を上ることは事実上不可能だった。（中略）なんでもいいから、脱出できるならやってみる気になっていた。（中略）しかし枯れ

た草の前方に一歩足を出したとたん、脱出が不可能だと悟った。(四一頁)

これらの引用をつらぬくものは「解放」への願いとその不可能性への絶望である。被植民者からの抑圧・監視・拘束の対象とされたオリエンタリストの危機が読み取れる。すでに繰り返しになるが、ジュークスが脱出し、生き延びなければならない砂のクレーター、そしてまたそこで受ける他者の抑圧から解放されることが、植民地闘争における被植民者の自由の追求という反転した命題を想起させるからである。砂のクレーターの外部には自己と他者の間の権力関係が存在している。ジュークスも、他者との関係の迷転にいどんで、常に監視されていてことを前提に脱出不可能と信じられている砂のクレーターから逃げ出してみせることが最大の目的となる。

脱出の実行にともなう作中人物の試み、不安、失敗への恐れは、のちに論ずる公房の『砂の女』のそれとほとんど類似している。しかしながら本章では、これ以降、むしろ両作品の差異を問題化したい。つまり、「解放」を願望する主人公たちの心の変化が両作品でどのように異なっているのかという点に本章の関心を移し、その差異を通してそれぞれの作品の主題を明らかにしていこうと思う。

『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』では脱出に成功したジュークスがもとのオリエンタリストの地位に戻る。それは自分の召使いのお陰だった。彼は

「クレーターを発見するといったん帰って他の者の援助を求めたが、皆、インド人であれ、白人であれ、死者の村に落ち込んだ者と関わることを拒んだ。しかし彼はポニイに乗ってクレーターに戻り、私を引き上げたのだった。(五三頁)」

この場面が監視からの解放の論理に沿って形成されているとすれば、被植民者が植民者に反抗し解放される可能性を提示しているともいえる。ここには、『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』におけるキプリングの意図を

示す大きなヒントと考えられる。ジュークスの逆オリエンタリズムの苦境からの脱出は白人ではなくインド人の召使によったということは意味深いことである。この結末は、両作品の分析に重要であり、作家の時代・思想・人間観の差異を浮き彫りにする。

仁木順平にとっての「解放」

仁木順平もジュークスと同様に脱出不可能な砂の集落に閉じ込められ、そこからの脱出を試みる。公房の『砂の女』における主人公の脱出においても、砂の集落が「パノプティコン」型の権力装置と類似することを権力関係・監視･処罰という三つの鍵概念を通して考察した。そこで、本節では、『砂の女』における「解放」という主題を権力の「生産的」な解釈と照らし合わせながら分析したいと思う。権力は、抑圧や禁止という否定的な概念として理解されてきたが、それだけでは権力の本質を見過ごしてしまうことになる。フーコーの分析した権力システムにおける「規律＝訓練」はこの砂の集落にも認められ、その不可避的な装置の中で主人公の仁木順平は馴化されていった。したがって主人公の「解放」への試みと「抵抗」のあり方は、この権力システムをどのように解体するかに求められた。

そのためにはまず、『砂の女』の「解放」の分析における仁木順平の心的変化に注意する必要がある。磯貝英夫は、この仁木順平の心理的転換、すなわち受動性から能動性への転換として次のように述べている。

> 絶望的な環境からの脱出―それも、本当の脱出は不可能と知った上での一時的な脱出にだけなぐさめを求めてきた、平凡で、受身の教師仁木は、その絶望的な環境を進んで引き受け、そのアキレス腱をにぎって、これをくつがえそうとする、積極的な人間に転移したのである。(11)

仁木順平が集落からの脱出を仕組むプロセスが、彼の性格に大きな変化をもたらすことをこの引用は語っている。つまり、仁木順平にとって、他者と

共に生きることを積極的に選択しなければ脱出に成功しないので、「その絶望的な環境を進んで引き受け」というような心の変化が見られる。「積極的な人間に転移したのである」は、他者と共に生きることを積極的に選択することが脱出の可能性を高くすると意識したのである。したがって、他者を受け容れ(認識し)、その上で他者とのコミュニケーションを確立しようとする。そのためにも人手不足の砂掻きの単調な作業を繰り返していくことに従わなければならない。そのことが逆に脱出に関わるコミュニケーションを取ることにつながる。それは、都市で仲間と積極的にコミュニケーションを取らなかった仁木順平の性格の大きな変化である。

仁木順平の第一回の脱出計画は、次のように実行される。彼はまず砂の女を縄で縛り付けておいてから、モッコをはこぶ連中が現れるのを待っていた。そして連中がいつもの通りモッコのついたロープを穴の下に下ろす時、砂をのせる代わりに男が乗り、上についたら一気に逃げ出すという計画だった。

> 上げるんだ！上るんだ！上げるまで、この手は離さんからな！（‥‥‥）女は、しばって、家の中にほうり込んである！助けたけりゃ、早くこの縄をあげろ！（中略）一週間の悪夢がばらばらになって、飛び散って行くようだ（中略）よかった‥‥‥よかった‥‥‥これで助かったのだ！ふいに体重が消えて、宙に浮んだ（‥‥‥）船酔いのような感覚が、すうっと体の中を通りぬけ、それまで手の皮膚をよじってさからっていたロープが、無抵抗に手のなかに残った。上の連中が、手を離したんだ！（六六頁）

一瞬計画は成功したと思ったが、失敗に終わる。こうして砂の穴の上にいる連中に、自分を自由にさせることをいくら願っても無意味であることを悟らされる。自分の力では出られなくなったのだ。「上の連中が、手を離したんだ！」という彼の叫びには、彼が完全に村人に依存しているという状態を象徴している。失敗したあと、彼には「解放」は幻影のように見えてきた。

『砂の女』における脱出のプロットは、集落の人々と仁木順平の間における支配と被支配の関係を寓喩したものと読みとれる。この第一回の脱出の失

敗は、穴の上にいる連中の力に対して仁木順平が無力であったためである。共同体や国家の権力に圧倒され、途中で挫折してしまうということにもなろう。しかし、再び脱出に挑む。

「それじゃぼくが最初に逃げ出してやる！」（一一五頁）。こうして第二回目の脱出作戦が始まる。今度は前よりもさらにいっそう時間とエネルギーをかけて念入りにプランを組み立てたのである。それはモッコ搬びの連中を待たずに、自分でロープを作って砂穴から地上に登っていくというプランだった。こうして暗闇の中、女が寝ているうちに脱出は実行される。今度はうまい具合に砂穴の上にまではい上がることに成功する。あとは、集落を駆け抜けて外部に逃げ出すだけだ。

> どれだけ走っただろう……すでに、幾つもの傾斜をよじのぼり、斜面を駆け下りてきた。力めば、りきむほど、夢のなかのように、虚しく力が空転してしまう。（一一九頁）

いくつもの砂丘を駆け抜けようとする場面描写である。描写は精密で、足が砂にとられて思いように走れないもどかしさが捉えられている。集落の共同体に主体性を奪われるという権力を握られた仁木順平の第二回目の脱出は、象徴的には、自己の自由を賭けてまさに国家という共同体からいかに脱出するかというものであった。〈権力〉を媒介として集落と国家が鏡像関係をなしているからである。実は脱出というモチーフこそ、外地からの引き揚げ者としての作家公房の原体験との間に鏡像関係があったのだ。公房は終戦後、満州国という国家の崩壊を受けて、日本本土へと帰還しようとした。しかし、本土といっても、そこも結局のところ公房にとってアイデンティティの根拠たる「故郷」ではなかった。ただそれゆえに、公房にとって国家からの脱出、個人の自由というテーマは彼の強烈な国家否定の意識により、作家に一貫する問題意識であった。帰郷と脱出の背反性こそ、作家にとっては永遠のパラドックスだったということもできる。脱出のモチーフと結びついた個人の自由の獲得は困難で、そしてまたもどかしいものである。それは逃げ

る足を砂にとられる描写に象徴されている。それでも、仁木順平を突き動かしているエネルギーは、まさに集落に国家を幻視することによって得られる抵抗の力を源泉とするものだった。こうして、主人公は必死になって「走った」。監禁された生活から自己を解放し、何ものにも縛られることなく、自分の思うとおりにふるまうことを夢見ている。しかし、砂は執拗に足をとらえる。

> 急に走りづらくなった。やたらに、足が重い。この足の重さは、尋常でない。ただ、そう感じているだけでなく、実際に、足がぬかりはじめているのだった。（一二一頁）

> 完全にうちのめされた。屈辱を恥じ入る気持ちさえ、トンボの羽に火をつけたような、あっけなさで、ちりちりと灰になってしまった。（一二二頁）

砂穴からの脱出に成功したが、地面に出たところで、今度はいくつもの砂丘のさらさらな砂に足をとられてまた村人に捕まえられてしまう。仁木順平は、集落から自分一人の力で脱出することは、一回と二回目の失敗にともなって不可能であることを認識する。そして砂の女に「失敗したよ……」「はい……」「まったく、あっさり、失敗してしまったもんだな」（一二五頁）と打ち明ける。

このことは、仁木順平の脱出が、砂の集落に国家を幻視することによる国家からの脱出であったという点で重要である。すでに述べたように、権力からの脱出に公房のラディカルな自由の実現の成否が賭けられてもいたからである。次節の他者関係の再構築のところでは、公房とキプリングの個人・共同体（国家）と解放に関する比較によって、『砂の女』の個と共同体関係の新たな解釈ができると思われる。

共同体と仁木順平の関係は徐々に明確になって来る。仁木順平は自由の獲得のために、共同体の権力と闘い通さなければならないことを悟る。砂の集

落の権力は沈黙にその根拠が置かれている。権力が自らを説明するということは、権力の実態、すなわち虚構性をあばくことになる。それゆえに権力は沈黙する。それに対して仁木順平はどのように行動したのか。

終わりに―他者関係の再構築―

人間の実存を国家・共同体・他者との関係の中で捉え直し、個人の解放とはどのような関係の中にあるのかを問うという、この公房作品のテーマ性はキプリングの「モロウビー・ジュークスの不思議な旅」との間に類似と同時に差異を保っている。二人は一世紀も離れた作家であり、文学的環境も異っている。それでも、両作品に共通する「脱出」のプロットにおける主題の類似と差異には驚くべきものがある。

両作品の結末の差異は、ジュークスは砂のクレーターから脱出することに成功するのに対して、仁木順平のほうは砂の集落から脱出は可能になっても脱出しないというところにある。仁木順平は、砂の女を病院に運ぶために半年ぶりに下ろされた縄梯子が「解放」の糸口となる。

> 女が連れ去られても、縄梯子は、そのままになっていた。（中略）これが、待ちに待った、縄梯子なのだ……（一四三頁）

仁木順平に「解放」の道が開かれた瞬間である。その時点まで砂の集落からの脱出は不可能に見えた。「これが、待ちに待った」というのは必死に待っていた彼の姿と「解放」が確実となった喜びが読み取れる。

一方、『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』では、ジュークスの召使いが馬のポーニックの足跡を追ってクレーターの上までやってきたのである。

> 彼は私が見上げているのを知ると手を上げてロープを見せた。（中略）私は逆さまの状態で険しい斜面を引きずり上げられ、ついに意識朦朧と

したままクレーターの上に着いた。（五一頁）

ジュークスはかくて異空間から解放され、大英帝国の白人のオリエンタリストへと戻っていく。しかし、この共通するクライマックスのあと、「モロウビー・ジュークスの不思議な旅」と違って『砂の女』ではアンチ・クライマックスが現れる。

べつに、あわてて逃げ出したりする必要はないのだ。（中略）逃げるてだては、またその翌日にでも考えればいいことである。（一四四頁）

ジュークスは砂のクレーターから引きずり上げられるとそのままクレーターの村落を去っていくのだが、この心内語によって仁木順平は脱出が可能になったにもかかわらず、集落に残ることを決心するのだ。その理由の一端に仁木順平の溜水装置の発見に伴う彼の変貌が描写されている。

そして、この砂とのたたかいを通して、徐々に、善良な市民である主人公の抱く秩序の観念や、日常的モラルが崩れてゆき、カラカラに乾き切った砂丘の底に、一種の毛管作用によって水がかわき出ることを発見したとき、その水とともに、新しい自分というものを、また発見するにいたるのである。(12)

これこそ『砂の女』の独創的な展開であり、公房は仁木順平の驚くべき判断の解釈を読者に任せているようである。「彼はなぜその集落から逃げ出さなかったのか」という疑問に関する解釈を試みると、次のようになろうか。すなわち、砂の集落の生活に挫折していたが、「その水とともに、新しい自分というものを、また発見するにいたるのである」というこの発見により自分の力で生きていく可能性あるいは人生をやり直す希望が生まれる。キプリングと違って、これはまさに公房的な予想外の結末である。仁木順平の世界観が変わることで、かえって「規律権力」の中における生産性が認められる

ことがこの作品の注目すべきところである。

さらに、物語のオープンエンド的な結末が読者にとって謎めいている。逃げ出す道を見出した時、彼は集落に残る決意をした。それは「希望」の発見により砂の世界で新しい存在理由を見いだしたからだと考えられる。

> 七年が経過し、失踪宣告がなされた結果、その「効果」によって彼が死亡したものと見なされ、法的に存在しなくなった。しかし、仁木が自らの社会復帰への可能性を振り捨ててまで選び取った、語り手が語ろうとしなかったその後の砂の村における「男」としての生活の方が、むしろわれわれに重い意味を持ってくるように感じられるのは、果たして気のせいであろうか。たとえ砂の村の世界であろうと、自分の存在の意義を見いだした仁木の生き方は、法社会の中でしか生きられないというような、思い込みは勿論、ア・プリオリな日常性そのものを問い直し前景化するような意味を持っているように思われるのである。(13)

「法社会の中でしか生きられないというような、思い込みは勿論」ということを実現したことも仁木順平の日常的な価値観と共同体に対する被害者意識が変わったことを主張している。『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』と『砂の女』の砂の集落の構造と権力による監視の姿勢をフーコーの近代社会に存在する権力とパノプティコン（一望監視施設）との比較のなかで捉え、支配する者と支配される側の二項対立的権力関係の分析に留まらず、社会構造の一部である個人が社会に抵抗し、主体性を獲得する過程と権力の「生産性」をたどってきた。その結果、二人の主人公の人間関係、社会活動（仁木順平の砂掻き作業、ジュークスのガンガ・ダスの命令に従うことなど）を通して内在化していく権力、あるいは他者の視線によって実現される自己意識（仁木順平は集落に回帰する、ジュークスは回帰しないが、被権力者の側から自分を見直すことができた）が権力の「生産性」を生み出すこと、個は権力に服従することで権力はもっとも効率的に働き、社会の基盤であることが明らかになった。

キプリングの文学は帝国主義、植民地主義、人種主義などの批判を浴びてきたが、『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』においてその支配構造を変化させた。植民地言説に基づく白人と原住民の支配関係を逆転させた設定を用いて、現地人の立場からみて不自由で無力な実存を支配者のイギリス人に経験させる。一方では、イギリス人統治者の原住民に対する無理解、無関心に関する批判があるにしても、その一方、最後に至って主人公を脱出させることはアンチ・オリエンタリズムの勝利を反転して象徴する点も見逃せない。

公房の『砂の女』を『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』と比較すると、仁木順平のほうは、集落における危機を無事乗り越えて脱出に成功するが、その瞬間にかえって集落にとどまることを決意する。主人公が抱いていた理想世界は実在しないことへの目覚めと、共同体の権力システムを進んで引き受けるという人間に仁木順平が生まれ変わったというように捉えられる。権力関係のなかにおける絶えざる闘争と衝突によって人間関係が変形し、逆転するといった過程が堆積された。一九世紀と二〇世紀の時代の権力概念を、フーコーの分析を媒介にして背景にふまえると、公房の「解放」の独自性が明らかになり、権力から「解放」されることはないという主張がみえてきた。権力は一つの制度、構造、支配的なものではなくて社会を統一する戦略的状況の名称であることを『砂の女』の主人公の共同体への心的変化の過程によって表現しようとしたと考えられる。

注

＊本文中に引用した『砂の女』のテキストは『安部公房全作品六』新潮社、一九七二年七月に拠った。『モロウビー・ジュークスの不思議な旅』のテキストは橋本槇矩訳『キプリング短編集』岩波文庫、一九九五年一一月に拠った。

（1）フーコーは「パノプティコン」と呼ばれる監獄形式を規律訓練型権力のモデルとして説明する。

（2）規律訓練型権力のモデルとは、単に法的権力（法の順守を要求する）ではなく、生産性と安全性にこだわる社会秩序の規格化に必要なものである。人間の生命・生活を規律的に管理と調整することによって現代の支配社会が成立したとされる。

（3）ミシェル・フーコー、田村俶訳『監獄の誕生』、新潮社。一九七七年、二〇二頁。

（4）E・W・サイード、今沢紀子ほか訳『オリエンタリズム』、平凡社、一九八六年、十月、訳者後書き。

（5）『監獄の誕生』、一四三頁。

（6）関良徳『フーコーの権力論と自由論』剄草書房、二〇〇一年四月、一七九頁。

（7）橋本槇矩、高橋和久『ラドヤード・キプリング作品と批評』松柏社、二〇〇三年六月十日、百三十頁。

（8）橋本槇矩、桑野佳明『キプリング　大英帝国の肖像』彩流社、二〇〇五年四月、四十頁。

（9）シジポスの神話というギリシャ神話がある。坂の上まで岩を押して上がり続けるという拷問である。 頂上についた瞬間にまたスタート地点に戻り、岩を押さなくてはいけない。人間はこのような意味のない行動を最も嫌うという逸話である。

(10) John Palmer. Writers of the day: Rudyard Kipling, Nisbet & Co Ltd. London, 1915. p. 52.

(11) 磯貝英夫「砂の女」『安部公房『砂の女』作品論集、近代文学作品論集成⑲』、クレス出版、二〇〇三年六月、四十七頁。

(12) 小島信夫「現代の愚意小説」『安部公房『砂の女』作品論集、近代文学作品論集成⑲』五頁。

(13) 木村功「『砂の女』論―〈仁木順平〉から〈男〉へ―」『安部公房『砂の女』作品論集、近代文学作品論集成⑲』二二二頁。